

少しでも早く、少しでも多くの人を助けられるように

頬を伝う涙が止まりませんでした

自宅での就寝中、突然の地響きに飛び起きたのを覚えています。自宅に家族を残し、すぐさま職場に向かうと、消防庁舎は大勢の被災者でごったがえしている状況でした。参集した職員ですぐさま隊を編成し、出動した救助現場での記憶が今でも忘れられません。

現場に到着すると、倒壊した家屋から逃げ出したと思われる市民から「家族がまだ中に……。地震直後は、呼びかけへの反応があったが度重なる余震以降、声がしなくなった」と伝えられ、私は確認するため倒壊危険がある家屋内へ入っていきました。

倒壊した家屋の中で人の頭部を発見しましたが、家屋の柱に挟まれており、呼びかけるも応答がありません。脈や呼吸もなく、露出している皮膚は冷たくなっている状態でした。

一旦屋外に出た後、外で待っていた家族に、次の生存救出の可能性が高い現場へ行かなくてはいけないことを伝え、と、「目の前の救助活動を放棄するのか」と胸に刺さる言葉を投げかけられました。立ち去る際には付近住民からも活動服を捕まれて静止され、自分の無力さと無念から頬を伝う涙が止まりませんでした。「すみません」と謝ることしかできない。

強く握った拳で太ももを叩きながら次の現場へ向かったことを今でも鮮明に覚えています。

今でもこの話をすると悔しかった気持ちが込み上げ目頭が熱くなります。当時のこの気持ちを忘れず、日々の訓練を行う際には救助を求めている人の立場に立ち、家族の心情も考えて活動するようになりました。そして何より少しでも早く、少しでも多くの人を助けられるように震災を経験していない隊員たちにも伝えています。

芦屋市消防署 救助隊副隊長(震災当時)

平成7年1月17日午前5時46分、淡路島北部の北緯34度36分、東経135度02分、深さ16キロメートルを震源とするマグニチュード7.3の地震「阪神・淡路大震災」は多くの被害をもたらしました。震災当時、救助隊の副隊長として現場で救助活動を行っていた職員に30年前に経験した災害現場での活動や教訓などを取材しました。

問い合わせ 消防署 ☎32-2345

阪神・淡路大震災という未曾有の災害を経験し、芦屋市消防本部では救助隊、消防隊、救急隊の強化を進め、30年の時が経ちました。また、緊急消防援助隊に部隊を登録し、芦屋市内で発生した災害のみならず、全国で発生した大災害に対して出動体制を構築し出動に備えています。芦屋市消防本部で取り組んでいる、各部隊の強化や日々の訓練などの様子をご紹介します。

救助隊



阪神・淡路大震災発生から翌年の平成8年、救助工作車Ⅲ型を導入し、救助資器材の充実強化と特別救助隊員の養成に取り組んでいます。

強化①

CSR訓練

倒壊建物内からの要救助者を救出する活動を「CSR」といいます。Confined (狭隘) Space (空間) Rescue (救助活動)の略で、倒壊した建物からの救出を想定し、災害現場さながらの緊張感で訓練を行い強化しています。



倒壊建物の外部から資器材を使用して、要救助者が取り残されていないか搜索します。



ガレキ救助訓練施設の内部はとても狭い空間で立つことができません。



要救助者は低体温症の可能性があるので、ブルーシートに毛布を張り付けたもので包み、救出します。

強化②

土砂災害対応訓練

地震や豪雨によってもたらされる土砂災害。土砂に埋没した要救助者の救出を想定し、土留めを使って迅速かつ安全な救出訓練を行い強化しています。



訓練開始!



実際の現場に近づけるため、土を深く掘って人形を埋めます。



埋没した要救助者の気道を確保するため、手で首から胸のあたりまで掘ります。



土砂が流れ込まないように、要救助者を囲んで土留め板を立てます。



人形を引き上げ救助! 安全・確実・迅速に救出できるよう取り組んでいます。



訓練から実際の現場を想定し、要救助者へ声かけを行います。



土留め板をハンマーで固定しながら土砂を掘り進めます。